仮面ライダーネオス＆ネクサス ～魔法少女と仮面ライダー～

鳴神　ソラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮面ライダーネオス＆ネクサス　～魔法少女と仮面ライダー～

【Ｎコード】
Ｎ３４７４Ｖ

【作者名】
鳴神　ソラ

【あらすじ】
少女は大切な者を守る為に戦う。そんな少女は絶望を切り開く２人の仮面の戦士と魔女を絶望から解放する精霊の龍を目にする。
そして少女は自分の記憶と違う歴史を目撃する。
これは本来なら絶望が待っていた少女達にマリオの弟子２人が介入した物語

プロローグ（前書き）

フォックス「まただよ；」

ルイージ「ようやるよね；」

スネーク「タグにある別サイトで書いてる覇王大系　ネギまなんて完結してないのにな；」

マリオ「まあ、始まりだぜ！」

プロローグ

少女は目の前の光景に目を開く。

知り合いの女の子と3人の知らない少女達が戦っていた巨大な生物の攻撃に倒れ付している。

4人の少女達は起き上がろうとするが目の前の巨大な生物の攻撃が体に来ているのかなかなか起き上がれない。

ダメなの？とそれを見ていた少女がそう思った時…それは現われた。

暗雲を振り払い、何かの物体が少女の上に現われ、それが変形して行くと左肩に何かの文字が入った白と黄色の巨人へとなった。

巨人「ホォープ！！」

巨人が力強く咆哮するとその隣に光を散らす白き龍が現われ、巨大な生物を攻撃する。

？？？「「「「「「うぉぉぉぉぉぉぉ！！！」」」」」」

そして、後ろからした声に少女や倒れていた少女達は振り向く。

すると、様々な仮面を纏った戦士と変わった格好をした少女達が少女や最初にいた少女達を脇を通り抜け、巨大な生物が出す黒い影を倒して行き、巨大な生物が操る浮いた建物を壊す。

ある者達は己の拳や足で打ち砕き、ある者達は己の持つ武器で攻撃

して行く。

少女や仮面の戦士とシスターに近い格好をした少女に治療されていた少女達がそれに驚いてる間に頭上を2人の仮面の戦士が通り過ぎ、巨大な生物に立ち向かって行く。

そして現われた巨人と龍がその内の1人に付き従い…

???「マ……ブ」

そして仮面の戦士が何かのカードを入れた瞬間…

少女は夢から覚めた。

少女「…ふにゅ…？」

ベッドから上半身起こし、寝ぼけ眼で周りを見る。

見えるのは何の代わりもない自分の部屋

少女「ふわぁ～…夢オチ…？」

あくびをした後に少女、鹿目まどかはぽけ～とした顔で呟く。

少女は今は知らない。

後に夢に出て来た少女達とそして2人の仮面の戦士達と白き龍と出会う事に…

プロローグ（後書き）

マリオ「と言う訳で始まりだ」

ルイージ「ホント作者は…」

スネークだな…」

ネス「感想を待ってるよ♪」

第1話　『仮面ライダーと魔法少女』（前書き）

フォックス「と言う訳で第1話！」

スネーク「今回でな…」

ルイージ「と言うかタグの奴での先だし…」

第1話　『仮面ライダーと魔法少女』

埼玉県麻帆良市に存在する学園都市麻帆良、そこでこの物語の主人公は…

明久「行くよ！レベル４のスパークマンとレベル４のガガガマジシャンをオーバレイ！」

デュエルしていた。

千雨「ってか良く作れたな…」

超「うふふ、私も再現するのに苦労したヨ」

目の前で明久が風香とデュエルしてるのを見ながら呆れた顔で千雨は超を見て、超は不適に笑って言う。

ちなみにやってるのは世界樹広場で観客で康太、明日菜、ネギ、小太郎、刹那、木乃香、月詠、アデュー、史伽、楓、エヴァ、茶々丸、ネギの助言者である事でキングスカッシャーとなったカモがいる。

明久「現われよ！Ｎｏ．３９！希望皇　ホープ！」

明久の言葉と共に物体が現われ、変形して行くと共に人型の巨人、希望皇ホープが姿を現した。

ホープ「ホォープ！！」

風香「うわぁ…ネオスにスターダストにホープって；」

風香は目の前の明久の場にいる3体のモンスターに冷や汗を流す。

明久「スターダストとネオスで守備モンスター2体を破壊し、ホープでダイレクトアタック！ホープ剣スラッシュ！」

明久の宣言の後にスターダストとネオスが風香の場にいる守備モンスターを破壊した後にホープが剣を握り、風香を切り裂く。

風香「んにゃあああぁぁぁぁぁ！」

その攻撃により風香のライフは0となり、ホープ達は消えた。

明久「やったぁぁぁ！！」

風香「楓ねえ～慰めて～～」

楓「まったく」

喜ぶ明久と楓に抱き付いてそう言う風香に抱き付かれた本人はふう～と息を吐いた後に頭を撫でる。

それを史伽が羨ましそうに見ている。

超「いや～良好だったネ、2人共、感謝するヨ」

明久「いやいや！アニメの様なデュエル出来て嬉しいよ！」

康太「……ホント、良く出来てる」

笑顔で言う超に明久は嬉しさ満点で腕に装着してるデュエルディスクを見て言い、康太もそう言う。

超「それで千雨さん！褒めて欲しいネ！」

エヴァ「貴様…それが狙いだろ」

茶々丸「例え超でも簡単にはさせません」

超「厳しいネ；」

ずずずっと千雨に近寄ろうとする超にエヴァと茶々丸が横入りして超はそう言う。

千雨「そう言えば…ちょっと不思議な噂をネット聞いたんだけどよ」

小太郎「どんな噂やねーちゃん？」

ふと、思い出した様に言う千雨に小太郎は代表で聞く。

千雨「いやよ…見滝原って場所で魔法少女がいると言うのをさ…」

明日菜「見滝原って…」

史伽「確か近年になって近代的な都市開発が進められた地方都市です～」

アデュー「と言うか魔法少女？此処に魔法使いがいるからそんなに珍しくないと思うんだけど…」

エヴァ「しかし…そんな場所に魔法使いがいるとは思えんな…しかも魔法少女とは…限定的な噂だな…」

木乃香「ネギちゃんに小太郎ちゃんもこの服を着れば魔法少女やな〜」

ネギ「そっ、そんなに露出したのは／／／／！」

小太郎「と言うか俺は魔法使いやないって！／／／／」

キングスカッシャー「ってかどこから取り出したんッスかその服；」

千雨の言った事に明日菜は頬に手を当てる隣で史伽がそう言い、アデューは頭を掻き、エヴァは呆れた顔をし、木乃香がズレた発言をしてどこからか取り出したお腹や胸元を露出した服にネギと小太郎は顔を赤くして言い、キングスカッシャーはツッコミを入れる。

ちなみにこの小説ではネギと小太郎は女の子である！女の子である！間違えない様に2回言いました。

明久「魔法少女か…」

康太「……」

明久が呟く隣で康太は騒いでるメンバーを見つつ、明久を見る。

その夕方…見滝原のとある場所である事が起こっていた。

普通の人には認識出来ない不気味な結界が張られ、その中で少女、まどかは親友、まどかの夢の中で魔法少女な服を着ていた美樹　さ

やかと目の前で目玉の様なネズミのような不気味な生き物をライフルで打ち抜いていた先輩でもあり、まどかの夢にいた知らない3人の1人であった巴　マミが小さな人形のような生物と戦っているのを見ていた。

マミ「これで終わりよ。ティロ・フィナーレ！」

大砲の様な大きな銃でそれを撃ちぬくと爆炎が出来、2人は勝ったと思った瞬間に生物の口から大きくて長いのが出てきて、マミに噛み付こうとして…

2人と生物の前からマミの姿が消えたと思った瞬間に黒い生物に何かが突撃する。

まどか「あれは！？」

まどかは生物を吹き飛ばした白き龍を見て驚いた。

それは夢の中に出ていた巨人と共に現われた龍であった。

さやか「あれって…スターダスト・ドラゴンじゃん！？何で！？」

隣でさやかが別の意味で驚いて、白き龍、スターダスト・ドラゴンを見る。

まどか「さやかちゃん、知ってるの！？」

さやか「常識と言うか…まどかってあれのアニメを見てないか…ほら、遊戯王ってカードゲームって名前は知ってるでしょ？あれはそれに出るモンスターの1体なのよ」

マミ「そうなの？」

まどかの問いにさやかは思い出して呟いた後に説明し、何時の間にかまどかの隣にいたマミがそう聞く。

さやか「はい…って！？マミさん何時の間に！？」

マミ「わっ、私も噛み付かれると思ったら何時の間にか…」

？？？「……大丈夫か？」

驚くさやかにマミも戸惑った顔で言った瞬間、さやかの左からした声に3人はした方を見て、まどかはまた驚いた。

そこにいたのは夢の中で巨大な生物と向かって行った仮面の戦士の1人であったからだ。

マミ「あなたは…？」

ネクサス「……仮面ライダーネクサス」

さやか「仮面ライダー！？もしかして京都の映画村で沢山出た人達の事！？」

ネクサス「……それは先輩」

マミの問いに答えたネクサスの言葉にさやかは驚いてそう言い、ネクサスはそう言う。

ネクサス「……今、仮面ライダーネオスのスターダストが相手しているから大丈夫だ」

さやか「仮面ライダーネオス？」

ネクサスの言葉にさやかは首を傾げるとネクサスはスターダストの背中を指すと…

まどか「（あの人は！？どうなってるの？）」

まどかはまた夢で出た人物に驚き、こうも連続で夢で出た人物が現われる事に戸惑う。

ネオス「いっけぇぇぇぇ！！シューティング・ソニック！」

ネオスの指示にスターダストは口にエネルギーを溜めた時…

――――お願い、魔女を助けて――――

スターダスト「！？」

スターダストの頭に聞き覚えのある声が響いた。

以前、自分がマスターに内緒で散歩に行った時、此処に来た事があり、そして、今回の様に結界に入り、似た奴と戦った時も…

スターダスト「ぐおぉぉぉぉぉぉ！！」

咆哮をした後にシューティング・ソニックを放ち、それは魔女を貫くと白い光を辺りに撒き散らし…

ネオス「（えっ？）」

ネオスは目の前の光景に驚いた。

白い光の中で黒い生物はどんどん形を変え、最後はちょっと白交じりの赤髪の少女となるとスターダストとネオスに微笑み、カードとなるとネオスの手に収まる。

ネオス「（これって…何時の間にか加わっていたのと…）」

それを見てネオスはあるカードを取り出して見比べる。

すると、主が消えた事で結界も消えて行く。それにネオスとネクサスは変身を解き、明久と康太に戻る。

明久「えっと…君達が魔法少女？」

そして、まどか達に明久はそう聞く。

ほむら「（……彼等は一体…）」

さっきの戦いを見ていたまどかの夢にいた3人の内の1人である暁美　ほむらは明久と康太を見る。

こうして…本来、絶望が待っていた魔法少女達は彼等と出会った

第1話　『仮面ライダーと魔法少女』（後書き）

ルイージ「出会ったね」

スネーク「スターダストが聞いた声とは…」

フォックス「…って言うか前半、別サイトの作者の小説を見てないと分かんないよな…しかもまだ十分なとこまで行ってないし…」

ネス「次回をお楽しみに！」

第2話　『話し合い』（前書き）

ルイージ「タイトル通りです」

フォックス「どう話すのやら」

スネーク「だな」

第2話　『話し合い』

前回の明久達とまどか達の出会いから数分後、メンバーはマミの部屋にいた。

いるのはあの場にいたまどか、さやか、マミに白い猫の様な生物、マミを魔法少女にしたキュゥべえに明久に康太、そして…

ほむら「……」

明久に見つかったほむらである。

マミ「させ、まずは自己紹介しましょう。私は巴　マミ、見滝原中学校3年よ」

さやか「あたしは美樹さやか！三原中学校2年生だよ」

まどか「私は鹿目　まどかです。さやかちゃんと隣にいるほむらちゃんと同級生です」

ほむら「……暁美　ほむら、まどかの言った通り」

明久「僕は吉井　明久、麻帆良学園の中学3年生で、こっちは僕の親友で同級生の…」

康太「……土屋　康太、写真と服なら任せろ」

明久「康太、最後のいらない；」

自己紹介して康太の最後の言葉に明久はツッコミを入れる。

その様子にマミはくすっと笑う。

マミ「それにしても…麻帆良ってあの学園都市ね…あなた達は何で此処に？」

明久「いや、実は康太とは別の親友が見つけた不思議な噂を確かめに来たんです」

マミの問いに明久はそう言った後に今までのいきさつを話す。

千雨の言った噂を確かめにライダーの力を使って見滝原に行き、丁度不思議な力を感知し、向かった先に結界が張られていて、中へ入り、進んでいてマミが襲われかけていたので助けたとの事…

マミ「そうだったの…」

ほむら「……」

明久の言った事にマミは頬に手を置き、ほむらは何か考える様にしていた。

さやか「それにしても…何でスターダストが実体化してるの！？あれアニメだけでしょ！？」

明久「あ～…僕のスターダストはカードの精霊なんだ」

まどか「精霊？」

さやか「マジで…ファンタジーが深まるわね；」

さやかの問いに明久は頭を掻き、まどかは首を傾げ、さやかは頭を抱える。

ほむら「聞きたい事がある」

さっきまで考え込んでいたほむらが口を開き、それに明久と康太はほむらを見る。

明久「何？」

ほむら「……仮面ライダーって何？」

さやか「あれ？転校生知らないの？結構有名だぞ仮面ライダーは」

ほむらの言葉にさやかが食い付き、説明する。

康太「……ちょっと聞く」

それにまどかが苦笑している間に康太は彼女に話しかける。

まどか「はい？」

康太「……この不思議生物は何だ？」

自分の方を向いたまどかに今まで何も喋らなかったキュゥべえの首元を掴んで聞く。

マミ「その子はキュゥべえ…私を魔法少女にした子よ」

キュゥべえ「させたの方が正確だけどね…マミの場合やばかったから…」

マミの言葉にキュゥべえが口を開いて言う。

明久「どう言う事？」

キュゥべえ「あの時のマミはホントにやばい状況でもし契約させなかったらマミは死んでたよ…」

康太「……魔女に襲われたのか？」

明久の問いにキュゥべえは顔を伏せた状態でそう言い、康太は聞く。

マミ「ちょっと違うのよね…」

さやか「これが私の知ってる知識だ。分かった？」

ほむら「ええ…（私の知ってる歴史ではそんな人はいなかった…もしかしたら…）」

困った顔をするマミの隣で説明を終えたさやかにほむらは頷き、心の中で考える。

明久「それで…そっちの事を話してくれない？」

マミ「そうね。こっちからの質問ばっかりだったし」

そう言ってマミは魔法少女とキュゥべえ、そして魔女について話す。

明久「これが魔法少女の証のソウルジェム」

マミ「キュゥべえと契約する事で出来る契約の証でもあるの」

マミの説明を聞いた後にマミのソウルジェムを見て明久は呟き、マミはそう言う。

キュゥべえ「あの…」

明久「何？」

キュゥべえに話しかけられ、明久はキュゥべえを見る。

キュゥべえ「お願いがあるんだ！マミ達の手伝いをして欲しい！」

明久「良いよ」

さやか「はやっ！？即決過ぎない！！」

ほむら「（うそ…）」

頭を下げて頼み込むキュゥべえのお願いに明久はすぐに言い、それにさやかがツッコミ入れてる間にほむらは驚いていた。

まどかを魔法少女にしない為に動くほむらにしてはキュゥべえの頼みはほむらに良い事だがキュゥべえを見て来たほむらにしては驚きものであった。

キュゥべえ「良いの？」

明久「うん、あれを見ていて魔女はほっとけないと思ったよ」

康太「……同じく」

キュゥべえの問いに明久が笑顔で言い、康太も頷く。

キュゥべえ「ありがとう！（後で他に話したい事もあるから少し待っていてください）」

明久「（？分かった）」

キュゥべえがお礼を言った後に明久の耳元でそう言い、明久は了承する。

話し合った後にそれぞれ解散した。

ほむら「まどか…」

まどか「何、ほむらちゃん」

ほむらと共に家に帰る途中でまどかにほむらは話しかける。

ほむら「あなたは魔法少女にならなくても良い…あなたは私が守るから」

まどか「えっ？」

ほむらの言葉にまどかは驚いてる間にほむらはまどかの手を両手で包み込み、まどかの目を見る。

まどか「どうして？」

ほむら「あなたにはなって欲しくないから…魔法少女にならなくてもあなたに出来る事はある」

そう言ったほむらの目にまどかは離せなかった。

続けてほむらは言う。

ほむら「まどか、あなたは私が守る。大切な人だから」

同じ時を何回も廻った少女は希望となりうる存在を見つけた。

第2話　『話し合い』（後書き）

スネーク「させ、キュゥべえが話したい事とは…」

ルイージ「ホントだね」

ワリオ「どうなるんだろうな…」

フォックス「だな」

ネス「次回を待っててね！」

第3話　『キュゥべえと明久と…』（前書き）

フォックス「タイトル通りの…」

スネーク「どうなるのやら…」

ルイージ「だね」

第3話　『キュゥべえと明久と…』

ネオス「よっ…と」

今、自分が住んでる部屋に鏡から入ってネオスは変身を解く。

玲「あら、アキ君お帰りなさい」

明久「ただいま、姉さん」

入って来た玲に明久はそう言う。

玲「あんまり遅くに帰らないでくださいね…ちなみにご飯ですかお風呂ですかもしくは私との…「ご飯です」…もう、アキ君は…」

明久「いや、残念そうな顔しないで；」

玲の言葉に明久がツッコミを入れると残念そうに去って行く玲に明久はそう言う。

キュゥべえ「君のお姉さんは凄い人だね」

明久「そう思う？」

肩にいたキュゥべえに明久はそう言う。

明久「それで話したいことって？」

キュゥべえ「はい、実は…」

ベッドに座り、椅子の上にお座りな体制でいるキュゥべえに明久は話しかけ、キュゥべえが話そうとした時…

???「その話、俺も加わって良いか？」

その言葉に明久とキュゥべえはした方を見ると…

明久「先生！？」

赤いフードを纏ったマリオであった。

マリオ「丁度お土産を渡そうと思ってたら…まさかお前がいるとはな…インキュベーター」

そう言ってマリオはキュゥべえを見る。

明久「キュゥべえの事を知ってるんですか先生？」

マリオ「まあな…俺達は危惧しているからな…相手側も俺達を危惧してるが…お前は違うようだな…」

キュゥべえ「……」

明久の問いにマリオはそう言い、キュゥべえを見て、見られたキュゥべえは黙る。

マリオ「1つ聞く。死んだと思ったらなぜかその姿になっていたか？」

キュゥべえ「！？」

マリオの言葉にキュゥべえは驚き、明久はマリオを見る。

明久「先生…」

マリオ「どうなんだ？」

師が何か言いたい事が分かった明久を気にせず、マリオはキュゥべえに聞く。

キュゥべえ「…はい…」

認めた途端、キュゥべえは光り輝き、それに2人は顔を腕で覆い、収まった後に退かすと…

そこには見覚えのある耳と左右に腰まで伸びる先がピンクの髪の先にあるリングに尻尾を持った赤い瞳に白い胸だけを覆うとスカートを纏った少女がいた。

マリオ「キュゥべえだな…」

キュゥべえ「はい…あなたの言う通り僕はトラックに轢かれたと思ったら何時の間にかさっきの自分…キュゥべえの姿に…」

明久「その姿は？」

顔を伏せるキュゥべえに明久は今の姿について聞く。

キュゥべえ「この姿は1人の時とか自分の事が知られた時に話す時

ので…こっちの方が話しやすいし元の自分の時の様にいられるので…」

明久「…何回か補導されなかった；」

キュゥべえ「他の服を着ますが…たまに…」

キュゥべえが言った後の明久の問いに顔を赤くして指をツンツンさせる。

マリオ「させ、君はこの先の歴史を知ってるか？」

キュゥべえ「……はい」

マリオの問いにキュゥべえは少し空けて頷く。

明久「先生も知ってるんですか？」

マリオ「ああ…似た世界に行き、大体な…」

キュゥべえ「そうですか…」

明久の問いにマリオは頷き、キュゥべえはそう呟いた後に…ガバッとマリオに頭を下げる。

キュゥべえ「お願いです！まどかを！まどか達を守ってください！！」

マリオ「無理だ」

明久「断るのはやっ！？何でですか！？」

キュゥべえの頼みを断りの両断を入れるマリオに明久はツッコミを入れた後に聞く。

マリオ「俺にはやる事がある。それにインキュベーターがいると言う事はこの世界は厄介な事が起きるからそれの対策を皆と話して立てなければならない」

キュゥべえ「そうですか…「それに…」？」

マリオの言葉に顔を伏せるキュゥべえだがマリオの言葉に顔を上げると…

キュゥべえ「わぷっ」

マリオ「俺がいなくても明久がいる。康太や千雨たちがいるからな。こいつ等は頼もしいからお前の願いを聞いてくれるさ」

明久「勿論！頑張りますよ！！」

キュゥべえの頭を撫でながらそう言い、明久の力強い言葉にマリオは笑った後にフードを羽織る。

明久「もう帰るんですか？」

マリオ「ああ、一刻も早く立てた方が良いからな」

そう言うとマリオは出て行く。

玲「あら？もう帰られるのですか？」

マリオ「ああ、それじゃあ」

そう言ってマリオは出た後に月を見る。

マリオ「（彼女…まどかをあの様な歴史にさせない様に明久頑張れよ…）」

そう心の中でマリオは言った後に歩き出す。

ちなみに…

玲「アキ君…その女の子は誰ですか？私と言う者がありながら！」

明久「姉さん何言ってるの！」

キュゥべえ「あうあう／／／」

なぜか分からないが明久がキュゥべえに抱き付かれて倒れてしまい、そこを玲が目撃してちょっとしたトラブルが起きていたが些細である。

第3話　『キュゥべえと明久と…』（後書き）

ルイージ「ホントどうなるんだろうね…」

スネーク「そして明久も大変だな…」

フォックス「まったくだな」

ネス「次回を楽しみにしててね♪

第４話　『新たな絆』（前書き）

ルイージ「明久君爆発」

スネーク「と言うかこう言うパターンはあんまりないと思うな…」

フォックス「そうだな…」

第４話　『新たな絆』

ネギ「そんな事があったんですか…」

次の日、３－Ａの教室で明久と康太から昨日の事について聞いたネギがそう言う。

アーニャ「契約ね…」

明日菜「願いが叶うって言うけど…何かデメリットってないのかしら？」

明久「そこなんだよね…」

康太「……そこ等へんが俺達も気になる所」

頬をポリポリ掻くアーニャの後に明日菜がそう聞き、明久は腕を組み、康太が静かにそう言い、何かを作っている。

千雨「何してるんだ康太？」

康太「……知り合った女の子が興味深い服を描いてたからそれを作ってる所」

明久「もしかして話をする前の歩いてる間に？」

千雨の問いに康太は顔を動かさずに手を動かしながらそう言い、明久は聞き、康太は頷く。

康太「……出来た…」

千雨「おお～凄い良い服だな」

明日菜「ホントね…土屋、後で良いから服を作ってくれない？」

康太「……了承」

出来上がった服に千雨は感嘆の声をあげ、明日菜がそう言い、康太は受けた。

明久「（それにしても…キュゥべえは何してるかな…）」

会話を聞きながら明久は心の中でキュゥべえが何をやっているかを考えていた。

キュゥべえはと言うと…

キュゥべえ「頼みがあるんだ。杏子、ゆま」

杏子と言われた赤髪のポニーテールと八重歯が特徴の少女とゆまと言われた緑髪の左右の髪をリボンで結んだツインテールの少女にキュゥべえは見る。

杏子はポッキーを口に銜えたまま頭を掻き、キュゥべえを見る。

杏子「何だキュゥべえ…頼みって？」

キュゥべえ「嫌な予感がするんだ…だから見滝原に来て欲しいんだ」

ゆま「嫌な予感って？」

キュゥべえ「それは分からない…けれど何か起きそうなんだ」

杏子の問いにキュゥべえはそう言い、ゆまの問いにキュゥべえはそう言う。

杏子「…まあ、もし魔女が出るならグリーフシードが手に入るし、行ってやるよ」

キュゥべえ「ありがとう杏子！」

頭を掻いて言う杏子にキュゥべえは頭を下げる。

その日の放課後

千雨「んで、見滝原に行くのか？」

明久「うん、魔女の事があるしね」

康太「……俺も服を渡しに…」

誰もいない屋上で千雨の問いに明久は頷き、康太がそう言うと2人はそれぞれのベルトを装着し…

明久&康太「ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ！」

ネオスバックル&ネクサスベルト「ライダーアップ」

音声と共に明久は音声と共に明久の周りに二重のサークルが現れ、

その中でネオスのシルエットが明久と重なり、サークルが回転して色が付くとウルトラマンネオスの腕と胸、足に遊戯王のＥ・ＨＥＲＯネオスを模した装甲を纏い、左腕に龍騎のドラグバイザーの外見を遊戯王のスターダストドラゴンに変えた『ネオスバイザー』を装備している仮面ライダー、仮面ライダーネオスに変身する。

音声と共に康太の周りにサークルが現れ、サークルが高速回転してサークルが止まり、消えるとムッツリーニはウルトラマンネクサス・アンファンスの肩と足に仮面ライダーサガの鎧を纏った感じの仮面ライダー、仮面ライダーネクサスに変身する。

そして2人は見滝原に向かって飛び出す。

千雨「頑張れよ～…させ、私も皆とやりますかね…」

ネオスとネクサスを見送った千雨はそう呟いた後に屋上を後にする。

ちなみに、飛んでいては見られるのではないか？と言う疑問が出るだろうがそう言う見られない様にウルトラ系ライダーのベルトには装着者の意思で姿を見れなくするステルス機能が付いてるのだ。

ネオス「何事もなければ良いけどね…」

ネクサス「……どうやらその何事が起きてるようだ」

ネオスの言葉にネクサスが前を見て言う。

見ると…見滝原の学校と思われる所に2人の目に結界が見えた。

ネオス「ネクサス！」

ネクサス「……分かってる」

すぐにネクサスはネクサスはウルトラマンネクサス・ジュネッスの肩と足に仮面ライダーオーズ・サゴーゾコンボの鎧を纏い、胸に仮面ライダーＢＬＡＣＫの鎧を纏った感じで胸にコアゲージがある『仮面ライダーネクサス・ジュネッスフォーム』となり、メタフィールドを学校を包むように展開するとそのまま張られていた結界に入る。

結界内はテレビや木馬が浮いた、無重力空間であった。

ネオス「前とは違うね…」

ネクサスＪＦ「……それでお迎えが来たな…」

ネオスは周りを見ていい、ネクサスＪＦが静かに言うと…前や後ろに片翼の天使を模した球体関節人形の姿をした異形の集団が現われる。

ネオス「もしかして魔女の手下？」

ネクサスＪＦ「……おそらく」

背中合わせになった後に短く会話した２人に集団は襲い掛かる。

その頃、別の場所で…

ほむら「はっ！」

マミ「ティロ・フィナーレ！！」

まどかとさやかを守る様にほむらとマミが魔女の手下と戦っていた。

マミ「きついわね…」

ほむら「ええ…（なぜ此処にこの魔女が？）」

ライフルを持ったマミの言葉に同意する中、ほむらはまさかの魔女の登場に驚いていた。

そしてほむらは思い出した。

この時間に来る前の事を…

今起きてる事態と似た事態に遭遇し…

まどか「ほむらちゃん！」

まどかの言葉にほむらははっ！として前を見ると魔女の手下が襲いかかろうとしていた。

？？？「おりゃあ！」

後一歩の所でほむらに襲い掛かろうとしていた魔女の手下が槍に貫かれる。

さやか「なっ、何なの！？」

いきなりの事に驚いている間に槍の持ち主である少女、杏子とネコ

のぬいぐるみのようなハンマーを持った小さい女の子、ゆまとキュゥべえが来る。

まどか「キュゥべえ！（あの赤い髪の子！夢に出て来た！）」

キュゥべえ「危なかったねほむら」

ほむら「彼女達はあなたが呼んだのね…感謝するわ」

驚いてるまどかの肩にキュゥべえは乗って言い、ほむらは短く礼を言う。

さやか「確かに危機一髪だったけど…その子や槍を持った子は誰？」

杏子「あたしは佐倉　杏子だ…隣にいるのは」

ゆま「千歳　ゆまだよ！」

キュゥべえ「嫌な予感がしたから2人に来て貰ったんだ」

マミ「それが当たったみたいね」

さやかの質問に杏子とゆまは自己紹介してキュゥべえが理由を言ってマミはライフルを持って周りを警戒しながら言う。

ネオス「皆！」

そこにネオスとネクサスが来た。

まどか「明久さん！」

杏子「おいおい、仮面ライダーもいるのか？」

ゆま「誰？」

さやか「知り合いだよ」

駆け寄るネオスとネクサスにまどかは安堵し、杏子は驚いた顔で言い、ゆまは首を傾げてさやかが言う。

ネオス「それにしても…まさかまどかちゃん達の学校に魔女が現われるなんて…」

さやか「ホントよ！…キュゥべえ！私を魔法少女にして！」

キュゥべえ「ええ！？」

まどか「さっ、さやかちゃん何でいきなり！？」

ネオスの言葉にさやかは頷いた後にキュゥべえにそう言い、キュゥべえは驚き、まどかは驚きながら聞く。

さやか「この状況で1人多い方が良いでしょ！それに…叶えたい願いがあるから今がその時なのよ！」

キュゥべえ「けっ、けど…」

ネオス「（キュゥべえ…）」

さやかの言葉にキュゥべえは縮こまり、それにネオスはキュゥべえ

があんまり契約したくないのでは？と考えた。

マミの場合は命が危なかったから契約をしたと聞いたが今回はそうなのになぜ渋っているのかにネオスは疑問を持つ。

さやか「契約する変わりに…恭介の手を直して！またヴァイオリンを弾ける様にして！！」

杏子「！？おい！止めろ！」

さやかの願いに杏子は止めようとするが一歩遅く、さやかの服が変わり、その手には護拳のあるサーベル状の刀剣が握られた。

杏子「お前！何で他人の為に願いを使うんだよ！」

さやか「何であんたにそう言われなきゃあいけないのよ！」

まどか「ふっ、２人共！」

ネオス「ちょっと今喧嘩している場合じゃないよ！」

ゆま「そうだよ！」

さやかを掴んで怒鳴る杏子にさやかも怒鳴り返し、それにまどかは慌てて、ネオスとゆまが仲裁に入った時…

？？？「あらら…契約しちゃったんだ」

８人と１匹とは違う声にネオスとネクサスはまどか達の前に立ち、さやかも刀剣を構え、杏子も怒っているが槍を構える。

現われたのは…黒い服を着た少女を連れ添った白い服を着た少女であった。

ネオス「君達は何者だ！」

ネクサス「……何が目的だ？」

少女→織莉子「私は美国　織莉子。後ろにいるのは呉　キリカ…目的は鹿目　まどかさん、あなたの排除よ」

まどか「えっ？」

構えるネオスとネクサスの問いに白服の少女、織莉子は名乗り、後ろにいる黒服の少女、キリカの名前を言った後にまどかを指し、指されたまどかは驚く。

さやか「排除って…殺すって事！？」

杏子「魔女でも魔法少女でもない奴を殺すって穏やかじゃないな…」

マミ「何でまどかさんを狙うのかしら？」

織莉子の目的にさやかは目を開き、杏子は目を鋭くし、マミが厳しい目で織莉子に聞く。

織莉子「彼女に魔法少女にも魔女にもなられては困るのよ」

ネクサス「……どう言う意味だ？魔法少女は分かるがなぜ魔女が出る？」

織莉子の言葉にネクサスは訝しげに聞く。

それに織莉子はキュゥべえを見て言う。

織莉子「知らないなら言ってあげるわ…魔女はね…キュゥべえと契約し、絶望した魔法少女の成れの果てよ」

ネオス「なっ！？」

まどか「うそ…」

織莉子の発した事にネオスは驚き、まどかは顔を青くするが、マミや杏子、そして今さっき契約したさやかはショックを受ける。

さやか「うっそ…」

マミ「そっ、そんな…」

杏子「おい！あいつの言った事はマジなのかよ！」

キュゥべえ「……」

さやかとマミは声が震え、杏子はキュゥべえに向いて聞き、キュゥべえは沈黙と共に顔を伏せる。

ネオス「（そうか…だから渋ったんだ…）」

ネオスはキュゥべえがなぜさやかと契約する時に渋る様子だったのかを知り…そして彼女が転生者だと言うのを思い出すと理解した。

魔法少女が絶望して魔女になるなら契約したくないが自分はそれを聞けば叶えてしまう存在。だからこそ自分達に手伝って欲しいと頼んだのだ…まどか達を魔女にしたくないから…それを理解し…ネオスは…明久は手を握り締めた。

織莉子「それに、ソウルジェムは私達の魂なのよ。体はね不死身だけどソウルジェムを壊されれば死ぬわ。キュゥべえはね魔法少女を消耗品として利用してるのよ！」

ネクサス「……なぜそんなに知っている？詳し過ぎにも程がある…」

ペラペラ喋る織莉子にネクサスは聞く。

キリカ「お喋りは此処まで！織莉子の目的の為に倒させて貰うわよ！！」

今まで黙っていたキリカが両手に装着した三本ずつ付いたかぎ爪を構える。

ほむら「（まずい…このままだと）」

ほむらはこの状況にそう呟いた。

マミ、杏子、さやかはさっきの言葉で動けない。

2人の能力を知っているが魔女の事もあるので自分の能力を安易に使えない。

ネクサスやネオスもいるが行けるか分かんないと思った時…

ネオス「知った様な口で…このキュゥべえが全て悪い様な口で言うな！！」

織莉子「なっ！？」

ほむら「えっ？」

黙って手を握り締めていたネオスが顔を上げて叫んだ内容に織莉子とほむらは驚き、まどか達もネオスを見る。

さっきまでのを聞いてまさかキュゥべえを庇う事に織莉子とほむらは驚いた。

ネオス「僕はこのキュゥべえの全てを知ってる訳じゃない！だけどこのキュゥべえは好きで願いを叶えてるんじゃない事だけは分かる！」

キュゥべえ「明久…」

ネオスの言葉に顔を伏せていたキュゥべえは顔を上げる。

キュゥべえになって分かった事だが、自分の意思にかまわず、願いを叶えてしまい契約を結んでしまう。

離れれば良いが歴史を知っている為にどうすれば良いかと悩んでいた時に明久達が現われた。

今も真実を告げられたのに自分を庇うネオスにキュゥべえは驚く。

ネオスも今まで聞いていたが織莉子は何かしらの事でキュゥべえを知ったのだろう…だが、ネオスはそれは自分の師であるマリオが言っていた別の歴史のキュゥべえであって今いる魂が転生者のキュゥべえではないと考えた。

織莉子「なぜあなたはキュゥべえを庇うの？さっきまでのを聞いてなぜ庇えるの？」

ネオス「友達だからだ！それ以外にもキュゥべえが苦しんでるのを見ていられるか！！」

織莉子の問いにネオスは真っ直ぐ見て叫ぶ。

その時、ネオスは光りに包まれた。

第４話　『新たな絆』（後書き）

ネス「作者的に長くなるので分けます」

リュカ「凄い所で；」

フォックス「だな」

第４話　『新たな絆』パート２（前書き）

ルイージ「と言う訳でパート２だね」

スネーク「光りに包まれたネオスは…」

フォックス「ＧＯ！」

第４話　『新たな絆』パート２

ネオス「此処は…」

真っ白な空間でネオスは戸惑っていた。

後ろにはスターダストがいて同じ様に警戒している。

ネオス「何が起こったんだ…」

そう呟くネオスの前に光りが集まり、１人の女性となった。

ネオス「（……まどか？）」

その女性の顔を見てネオスはそう思った。

すると、ネオスのカードデッキから魔女を倒した際に出たのを含めた２枚のカードが飛び出し、女性の前に浮遊し、他に９枚の同じカードが現われる。

どれもまどか達と同じ位の年齢の女の子が描かれていた。

ネオス「……あなたは神ですか？」

その問いに女性は首を横に振る。

スターダスト「ぐおぉぉぉ」

ネオス「？…あっ」

スターダストの鳴き声にネオスは首を傾げた後にスターダストの見る方を見てネオスは自分が持つカードケースが光ってるのに気づく。

そして中から光ってるカードを取り出す。

ネオス「モンスターエクシーズのカードが…」

光り輝くカードを見た後に女性の前にある１１枚のカードがそれぞれのカードと光りの道を作る。

ネオス「これって…」

驚いている明久に女性はカードを１枚、ネオスに渡す。

それを見た後、ネオスは女性を見て、女性は頭を下げる。

ネオス「…良し！」

ネオスはそのカードをベントインする。

ネオスバイザー「サンクチュアリベント」

ネオスが光りに包まれた事に誰もが驚いていた。

織莉子「何これ…」

さやか「何が起こってるの？」

織莉子とさやかが言った後にさらに変化が起きた。
光りを中心に魔女の結界が変わって行く。
キュゥべえ「これは！？」
マミ「魔女の結界が塗り返されている？」
テレビや木馬が浮いた、無重力空間だった周りの景色が変わって行き…そこは光り輝く神殿がある空間へと変わった。
まどか「変わった…」
杏子「神聖な感じだな」
その光景にまどかと杏子が呆然と呟いた後にネオスを覆っていた光が晴れ、鎧が白銀に染まり、龍を模した感じに変わった『仮面ライダーネオススターダスト』が現われる。
ゆま「凄い…」
現われたネオスSにゆまはそう呟いた。
全員に見られてる中、ネオスSはカードを取り出す。
ネオスS「頼むよ…」
そう言った後にネオスSはカードを1枚取り出して掲げる。

ネオスＳ「オーバレイ・ネットワークを構築！エクシーズ召喚！！」

ネクサス「……それは…！」

さやか「確か最近になって出来た…」

ネオスＳの言葉と共に出来た渦にネクサスとさやかが驚いた後に１人の少女の幻影が現われた後に渦から物体が現われる。

ネオスＳ「現われろ！Ｎｏ．１７！リバイス・ドラゴン！」

その言葉と共に現われた物体は変形し、青き龍となり、咆哮する。

さやか「うっそぉぉぉぉ！？」

マミ「あの時の龍とは違う…」

ほむら「（確実に…歴史が変化している！）」

織莉子「（こんなの…私は見てないわ！）」

さやかとマミは驚き、ほむらは自分が行っていた歴史が変化している事に確信し、織莉子は自分の見た歴史と違っている事に驚愕する。

ネオスＳ「さらに！翼の魔法少女の姿にエクシーズチェンジ！」

ネオスＳの言霊と共にリバイス・ドラゴンは咆哮した後に光りに包まれ、それが晴れるとそこにはリバイス・ドラゴンの翼を持ち、翼をモチーフにした服を纏った少女が立っていた。

ゆま「ドラゴンさんが！？」

キュゥべえ「魔法少女に！？」

ネオスＳ「行くよ！リバイス・ドラゴン！」

ゆまとキュゥべえが驚いてる間にネオスＳが言うと少女の姿となったリバイス・ドラゴンは頷いた後にかぎ爪を装備して、ネオスＳは織莉子と、リバイス・ドラゴンはキリカへ挑む。

織莉子「くっ！」

キリカ「やってやろうじゃない！」

織莉子とキリカもそれぞれの武器を構えた後に戦闘に入る。

さやか「いっ、色々あり過ぎて頭が…」

杏子「確かに…」

目の前で起こってる事にさやかと杏子は呻く。

さっき魔女の真実にソウルジェムの真実も聞いた上にいきなり龍の召喚をしてはその龍を少女の姿にしたのだ。

頭がこんがらがるのは仕方が無い。

そこである物にマミは気づいた。

マミ「あれは…」

こちらに来る存在に他のメンバーも気づく。

ほむら「魔女だわ…」

ネクサス「……そうか」

ほむらの言った事にネクサスがそう言う。

マミと杏子、さやかは複雑な顔をする。

元々は自分達と同じ魔法少女だったのだ。

どうしようかと思った時…

ネオスS「はぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

織莉子と戦っていたネオスSが腕を光らせ、魔女に向かって光線を放つ。

魔女はそれに当たると光りに包まれ…

まどか「（えっ？）」

その中でまどかは光りの中で魔女が少女の姿を見た後、少女はネオスSに微笑んだ後にカードとなってネオスSの手に収まる。

織莉子「この！」

自分から顔を逸らしたネオスSに織莉子は装飾が施された水晶玉の

ような球体を無数に撃ち出し、攻撃を行う。

ネオスSはそれをネオスジャベリンやネオスシールドで防ぐ。

キリカ「ぐあっ！」

リバイス・ドラゴン「！」

一方、キリカはリバイス・ドラゴンの攻撃に吹き飛ぶ。

織莉子「（どうなってるの！前のと全然違う！この人物は何なの！）」

目の前のネオスSに織莉子は心の中で叫ぶ。

織莉子「あなたは彼女がいる事での見滝原が壊滅するのよ！」

ネオスS「そんなの知るか！たった1人の少女を犠牲しての平和なんて…」

織莉子の言葉にネオスSはそう言った後に武器を離し…右手を開いた後…

ネオスS「こっちは願い下げだぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

織莉子の頬を叩いた。

ネオスS「何で真っ先に人を殺すのを考えるんだ！何で他の方法を考えないんだ！」

頬を押さえる織莉子にネオスSは叫ぶ。

キリカ「織莉子…」

戦意を無くした織莉子にキリカはリバイス・ドラゴンから離れて織莉子を抱き締め、ネオスSを睨む。

織莉子「……あっ」

顔を伏せていた織莉子はあるビジョンが見えた。

そのビジョンはシルエットとなった戦士がある魔女を打ち倒す映像。

織莉子「あなたは…何者なの？」

その問いにネオスSは変身を解いて言う。

明久「ただの、悲しい思いを止めたい仮面ライダーさ」

苦笑して言う明久に織莉子はただ、静かに明久を見るのであった。

ほむら「（間違いない…彼なら…）」

そしてほむらは明久を見て確信していた。

まどかを先の未来へ導いてくれると…

第４話　『新たな絆』パート２（後書き）

マリオ「さてさて、明久はどう行くのやら…」

ルイージ「次はどうするの？」

フォックス「だな」

秘密です

ネス「次回を楽しみにしててね～」

第5話　『まどか、麻帆良学園へ』（前書き）

マリオ「第五5話だ！」

ルイージ「タイトル通りだね」

フォックス「だな…」

スネーク「んで登場だな」

第5話　『まどか、麻帆良学園へ』

まどか「うわぁ…」

目の前の光景にまどかは感嘆の声をあげる。

ほむら「凄い…」

隣でほむらも驚いていた。

さやか「うわぁ～此処が学園都市麻帆良か～」

杏子「聞いてはいたが凄いな」

ゆま「ホントだね」

さやかと杏子、ゆまがそれぞれ言う。

今、まどか達は麻帆良に来ていた。

来た理由はあの後、あの場にいたメンバーにネオスが話し合う必要があるとの事で麻帆良に来て欲しいとお願いしたので来ているのだ。

織莉子「此処が…」

キリカ「うわぁ…」

そのメンバーに襲い掛かった織莉子とキリカもいる。

そして…

まどか「可愛いねキュゥべえ」

キュゥべえ「あっ、ありがとうまどか」

人間になったキュゥべえもいる。

今の服装はワンピースを着て、耳を隠す為に麦藁帽子をかぶっている。

この姿になった時はまどか達（特に織莉子やキリカにほむら）は驚きまくっていた。

???「ほっほっほっ、君達が明久君の言っていた子達だな」

その言葉に周りを見ていたまどか達はした方を見ると…

頭が長い老人がいた。

マミ「えっと…あなたは？」

近右衛門「ワシは近衛　近右衛門じゃ、明久君達の通っとる学園の学園長を勤めておる。君達の事は明久君達より聞いておる」

恐る恐る聞くマミの問いに老人、近右衛門は顎を摩りながら自己紹介し、後半の言葉にまどか達は驚く。

近右衛門「ワシは君達と同じ魔法を使う者なんじゃよ。明久君達はそれでワシや魔法を知ってるメンバーに話したのじゃ」

驚いてるまどか達に近右衛門はそう言う。

織莉子「えっと…どう言う事ですか？」

近右衛門「まあ、話は明久君達の所で話そう」

ほれこっちじゃと近右衛門は背を向けて歩き出し、まどか達は付いて行く。

数分歩いて行くと…明久の声がする。

明久「シューティング・スター・ドラゴンでダイレクトアタック！スターダスト・ミラージュ！！」

史伽「ですぅぅぅぅ！！」

そこでデュエルしていて今回は史伽とで今決めた所の様だ。

史伽「負けたです～」

風香「流石はチャンピオンになった事のあるよね～」

史伽の後に風香が明久にそう言うといやいやと明久は手を振る。

明久「あっ、皆来たんだ。キュゥべえも人の姿なんだね」

さやか「えっ？キュゥべえの奴知ってたの？ってかさっきのアニメ並みのデュエル何！？」

明久「あの話し合いの後にね…後、クラスメイトが作ったんだ」

気づいた明久が声をかけ、さやかが明久に近寄り、２つ聞き、明久は答える。

この場に明久や鳴滝姉妹以外に康太にアデューやあやか、楓、刹那、千草、月詠、美空、千鶴、真名、小太郎、ネギ、明日菜、アーニャ、エヴァ、茶々丸、キングスカッシャー、千雨がいた。

その後、メンバーは自己紹介する。

近右衛門「さて、お互いに終えた所で話し合いに入るかのう…」

まどか達が自己紹介を終えた後に近右衛門がコホンと咳払いしてからそう言う。

マミ「それで…さっき言っていた事についてお願いします」

近右衛門「うむ、それについてはのう…君達はそこにいるキュゥべえ君と契約した子を魔法少女と言うが別に契約しなくても魔法は使えるのじゃ」

マミのお願いに近右衛門は頷いた後にそう言う。

その言葉にマミ達、特に織莉子、キリカ、ほむらは驚く。

織莉子「でっ、出来るんですか契約しなくても!?」

近右衛門「個人によるが…修行すれば使える様になるのじゃ…この様に」

驚き冷めないまま聞く織莉子に近右衛門は頷いた後に実際に魔法の矢を上へ飛ばす。

それにまどか達が驚く様子に近右衛門はほっほっほっと笑う。

近右衛門「さて、魔法はあんまり表では知られてはならないものじゃ」

さやか「やっぱりバレたら罰があるから？」

笑うのを止めて真剣な顔をする近右衛門の言葉にさやかが代表で聞く。

近右衛門「確かに罰がある…じゃけどな、広まれば簡単な殺人の道具になるからじゃ」

さっきまでの穏やか差が嘘の様に顔を厳しくして近右衛門は言い、それにまどか達は震える。

近右衛門「ワシらの魔法はの、使える様になれば誰だって扱える物じゃ、さっき放った魔法の矢は簡単に人を殺す事も出来るのじゃ」

その言葉にまどかは顔を青くする。

マミやほむらにキュゥべえと会う前は普通の女の子だったのだ。

先日だって殺されかけようとする事もあったのだ。

ほむら「まどか…」

それに気づいたほむらが安心させる様にまどかに抱き付き、頭を撫でる。

それにまどかはぎゅっとほむらの服を掴む。

隣でマミが羨ましそうに見ていた。

近右衛門「さて、明久君がなぜワシに君達の事を教えたかと言うと君達の存在が危ういからじゃ」

まどかが落ち着いた後に近右衛門は口を開いて言う。

キリカ「危ういと言うと？」

近右衛門「うむ、聞いたが君達魔法少女は絶望する事で人を襲う魔女になると聞いた。それを聞いた瞬間、正義と抜かす馬鹿者達の標的になると考えたからじゃ」

杏子「どう言う事だ？」

ゆま「正義って名乗るなら何で？」

キリカの問いに答えた近右衛門の言葉に杏子とゆまが言う。

近右衛門「それがのう…人外や人ではないと思える力を持つ者をすぐに排除しようとしたり、自分達の正義は間違ってないと怒ると殺そうとしたりする輩が多いのじゃよ…」

キュゥべえ「まさか…」

頭が痛いと呟く近右衛門の言った事をキュゥべえは理解し、ほむらやマミ、織莉子とキリカも顔を強張らせていた。

マミ「つまり…学園長さんが言いたいのはもし、学園長さんの言う通りの魔法使いの内の誰かが魔法少女が魔女になる瞬間を見たら消そうと動くに違いないって事よ」

疑問を浮かべるまどか達にマミはそう言う。

理解したまどかは驚き、杏子やゆま、さやかは顔を青くして震える。

近右衛門「マミ君の言う通りじゃ、もし、魔法少女の魔女化を目撃した者がおればすぐさま魔法少女となった子達を排除しようとさっき言ったが動くじゃろう」

明日菜「どうにか出来ないんですか！」

木乃香「どうなんお爺ちゃん？」

近右衛門の言った事に聞いていた明日菜が言い、木乃香も前へ出て聞く。

アデュー「学園長！流石に何もしてないのにそう言うのされたら逆に魔女を増やす可能性があるぞ！」

キングスカッシャー「オレッチも同じ意見ですさ！どうなんッスか」

近右衛門「だからこそ頭が痛いのじゃ、明久君はワシだけに話したのは他の魔法生徒や魔法先生の中で出て来るのを恐れてだからのう

…だが、魔法少女は世界中におるのじゃろう？」

キュゥべえ「はい…」

明日菜と木乃香に続けて言うアデューとキングスカッシャーの言葉に近右衛門は頭を抑えてそう言い、後半の問いに悲しい顔をしてキュゥべえは頷く。

？？？「そこは俺達に任せてくれ」

織莉子「誰！？」

この場にいるメンバー以外の声に織莉子は言うと…

マリオ「よう！」

明久「先生！」

康太「師父！」

千雨「師匠！」

さやか「ええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！？」

現れたマリオに明久と康太、千雨が言った後にさやかは叫ぶ。

まどか達も驚いてマリオを見る。

近右衛門「おお！マリオ殿、任せてくれとは？」

マリオ「外国や他の所の魔法少女に関しては俺達に任してくれって事だ…もし魔法使いがそれを見て広まれば一斉に魔女化が起こると言う最悪の事態になりかねん」

平然と話しかける近右衛門に言ったマリオのその言葉に今度は織莉子やキリカ、ほむらは顔を青くする。

自分達が危機する事態以外の事が起こると言われたからだ。

近右衛門「それは確かに厄介じゃな」

マリオ「だからこそ、俺達が動くんです。此処や見滝原は明久達やあなたに任せます」

近右衛門「あい分かった…そちらも頑張ってくれたまえ」

マリオ「了解」

話し合った後にマリオは赤いフードを羽織り、顔を隠すとその場を去る。

エヴァ「それにしても…」

まどか「ふえっ？何ですか？」

場を黙って見ていたエヴァがまどかを見て、見られた本人は戸惑い、マミとほむらが前に出て隠す。

エヴァ「そいつから凄い魔力を感じるぞ」

まどか「ええ！？」

千雨「マジかよ」

エヴァの言った事にまどかは驚き、千雨は目を開く。

明久「どれ位なの？」

エヴァ「木乃香より少し劣るが物凄い魔力を秘めているな、生まれつきだな」

まどか「けっ、けど、私の両親は魔法使いじゃないですよ！」

明久の問いにエヴァはそう言い、まどかは手を振る。

近右衛門「ふむ……まどかちゃんや」

まどか「あっ、はい」

会った時に感じてたまどかの魔力に近右衛門も歩きながら考えていた事を話す前にある事を聞く為に戸惑っているまどかに話しかける。

近右衛門「…この先、彼女達や明久君達に魔女を倒す為に付いて行くんかのう？」

まどか「……はい」

近右衛門の問いにまどかは間を空けた後に肯定した後に言う。

まどか「だって魔女は元々はほむらちゃん達と同じ魔法少女だった

んです…知ったのに自分だけ離れているのは出来ません」

近右衛門「（やはり…）」

まどかの言葉に近右衛門は内心で納得する。

近右衛門が最初にまどかを見た時は魔力の多い女の子と認識し、さっきまでの会話を聞いてさらに優し過ぎると追加した。

近右衛門にとって彼女は魔法使いらしい魔法使いの素質を持っている人格の持ち主だが、その優しさ故に絶対にさっき近右衛門が言った魔法使いの標的になる事は確実、そして彼女を見て近右衛門は教師として見た事を言う。

近右衛門「まどかちゃんや…君は自分が何の取り柄もない人間じゃと思っておるじゃろ？」

まどか「えっ！？何で分かったんですか！？魔法で調べたんですか？」

近右衛門の突然の言葉にまどかは驚きながら聞く。

近右衛門「いやいや、魔法使いとしてではなく、教師としての言葉じゃ…ワシから見て君には取り柄はある」

まどか「それって何ですか？」

顎を摩って優しく言う近右衛門にまどかは聞く。

近右衛門「それは自分で見つけるのじゃ…見つけて事それは自分の

取り柄だと誇れるもんじゃ」

近寄りまどかの頭を撫でながら近右衛門はそう言う。

まどか「学園長さん…はい！」

元気良く頷くまどかに近右衛門は目を細めて優しく見る。

エヴァ「止めろとは言わないのだな」

近右衛門「こう言う子は何言っても無駄じゃよ。止めさせようとすれば歪んでしまうもんじゃ」

話しかけるエヴァに近右衛門は苦笑して言う。

近右衛門「ただ、ワシもただ背中を押してあげるだけにはせん…まどかちゃん」

まどか「あっ、はい！」

真剣な顔をして話しかける近右衛門にまどかは緊張して返す。

近右衛門「硬くならなくてええ…まどかちゃん、お主、戦い以外の魔法使いにならぬか？」

まどか「ええ！？」

杏子「おいおい、魔法は殺人の道具になるんだろ？」

近右衛門の言った事にまどかは驚き、杏子がそう聞く。

近右衛門「うむ、じゃが、それ以外にも人の怪我を治す治療魔法や相手を捕縛したりする魔法などもあるのじゃ…最初に言ったのは魔法の使い方を誤らせない為のに言ったのじゃ…」

マミ「つまり、最初に言った事は誤った魔法使い…」

さやか「なっ、成る程…」

近右衛門の言葉にマミは呟き、さやかは納得する。

近右衛門「別にいますぐじゃなくても良い…決めるのは君じゃ…」

そうは言ったものの近右衛門はまどかがすぐに言うじゃないのかと言う懸念もあった。

まどか「……少し待ってください」

近右衛門「…そうか」

だが、近右衛門の懸念はなくなり、近右衛門は内心ほっとして答える。

近右衛門「帰るのは明日でも良いじゃろう…泊まるならこちらで寝床を用意してあげよう」

明久「それじゃあ次は今後の事でのどうするかの話し合いですね」

近右衛門がそう言った後に明久がそう言う。

まどか「（魔法使いか…）」

まどかは話し合いを聞きながら考えていた。

少女の先はどう行くかは少女の心が示す…

第5話　『まどか、麻帆良学園へ』（後書き）

ルイージ「色々と学園長が…」

フォックス「だな…」

スネーク「さて、まどかは少し時間を貰って決めるのは…」

ネス「次回を待っててね♪」

第6話　『それぞれの麻帆良歩き』さやか・杏子・ゆま編（前書き）

フォックス「今回は分かれてのお話か」

スネーク「それで最初は上記の3人か…」

ネス「確実にカップリングだね～」

第6話　『それぞれの麻帆良歩き』さやか・杏子・ゆま編

前回の後、まどか達は分かれて麻帆良を観光する事にしたのであった。

さやか「それにしても麻帆良か～あたし初めて来たわ」

ゆま「ゆまも～」

仲良く歩くさやかとゆまの後ろで杏子は無言で歩く。

さやか「どうしたの杏子？」

ゆま「キョーコ、具合悪いの？」

杏子「いや…」

振り返って聞くさやかとゆまに杏子は頬をポリポリ掻く。

美空「杏子さ～ん、待ってください！」

そこに美空が走って来る。

さやか「あっ、さっき明久と一緒にいた…」

美空「春日　美空と申します…しかし久しぶりですね杏子さん」

さやかの言葉に美空は自己紹介した後に杏子にそう言う。

杏子「あっ、ああ…」

さやか「知り合いだったの？」

美空「はい、けどびっくりしましたよ。あの出来事で行方不明で心配でしたけど生きていたんですね」

歯切れが悪い杏子の隣でさやかは聞き、美空は頷いて、そう言う。

さやか「“あの出来事”？」

ゆま「どう言う事…？」

美空「あ…それは…」

美空の言った事にさやかは首を傾げ、ゆまの問いに美空はどもった時…

？？？「杏子ちゃん？杏子ちゃんですか！？」

杏子「この声は…」

美空「シスターシャークティ」

いきなりの声に杏子は恐る恐る振り向き、美空が声の人物の名を言う。

さやかとゆまもつられて振り返るとシスター服を着た女性が来る。

シャークティ「ああ！やっぱり杏子ちゃんだったんですね！久しぶ

りですね！」

杏子「どっ、どうも…」

駆け寄って来て杏子を抱き締めるシャークティに本人はそう答える。

さやか「あの…杏子とどう言う関係なんですか？」

数分後、協会に案内され、椅子に座ったさやかが聞きたい事を言う。

シャークティ「彼女とは神父であったお父さんとの関係で知り合ったのです」

さやか「神父！？と言う事はあんたは聖職者関係！？」

杏子「あ…ああ…」

シャークティの言葉にさやかは驚いて聞き、杏子は顔を逸らして答える。

美空「杏子さんは小学生の時にお父様と此処に来て、その際に知り合ったんですよ」

ゆま「あの…それで、“あの出来事”って何ですか？」

美空の言葉の後にゆまが気になっていた事を聞く。

それにシャークティは顔に影が入った後に杏子を見て間を空けて口を開く。

シャークティ「その出来事を話す前に杏子ちゃんのお父さんについて話して置きましょう…杏子ちゃんのお父さんは『他人を助けたい』と言う立派な信念を有する聖職者でした。出会った後にあっち側から連絡を貰ってました。立派な新年をお持ちでしたが教義に含まれない内容まで信者に説いた結果、信者や所属されていた本部から見放されたそうです…ところが、少しして教会に沢山の人が来る様になったそうなんです」

さやか「成る程…」

シャークティの説明にさやかが納得した後にですが…とシャークティは顔を伏せる。

シャークティ「突然、杏子ちゃんを除く自分の家族と共に心中をしたのです。これがさっき言った出来事です…なぜこうなったかの詳細が未だに分かってないのです」

杏子「……それはあたしが魔法少女になったせいなんだ」

今までシャークティの話を黙って聞いていた杏子がギュッと手を握り締めてそう言う。

ゆま「キョーコ？」

美空「どう言う事ですか？」

ゆまと美空の視線を受け、杏子はぽつりぽつりと話す。

杏子「シスターシャークティが言った信者や本部から見放された時の親父の姿が痛かったからキュゥべえに『親父との話に人々が耳を傾けてくれるように』と願ったんだよ」

さやか「ん？それじゃあ良い事じゃないかしら？」

杏子の言った事にさやかは顎に指を当ててそう言うと杏子は続ける。

杏子「最初はそうだったさ…けどな…それがあたしの魔法だと分かった時、親父は酒浸りになった末に錯乱しちゃって…後はシスターシャークティが話した通りさ」

美空「そうだったのですか…」

その時のを思い出したのか悲痛な顔になる杏子を見てさやかは自分が契約した時の彼女の様子を思い出す。

自分が他人の為に願いを言って契約した時の杏子の様子にあれは自分と同じ境遇になるかもしれないから怒ったのだとさやかは考え…マミとのとある会話を思い出し…恥じた。

さやか「あたしさ…」

口を開いたさやかにメンバーの目が集まる。

さやか「契約する前のとある時にマミさんと話してる時、マミさんに言われた事があるんだ…恭介…知り合いで事故で指が動かなくなった男の子の指を魔法で治して見返りを求めている部分があるんじゃないかって…その時は否定したけど…今、その否定した部分が当

たってる事に気づいた…あたしは大馬鹿者だよ…」

語った後にさやかは顔を伏せる。

ゆま「さやかお姉ちゃん…」

シャークティ「……誰かを助けたいと言う思いは恥じる物ではありません…ですが、安易に魔法を頼ったのは悪いですね」

さやか「そう…ですか…」

シャークティの言葉にさやかはさらに顔を伏せる。

シャークティ「だからこそ…己のしてしまった事を忘れない様にしましょう…それが使った者としてのやる事です」

さやか「……はい」

返事したさやかにシャークティは優しくさやかの頭を撫でる。

杏子「（さやか…）」

それを見た杏子はぎゅっと胸の前で手を握り締め、さやかを見る。

杏子「（あたしの時の様にさせないからな…どんな時でもあたしがあんたを守る！）」

そう決意する。

シャークティ「さあ、話はこれ位にして、そろそろご飯にしましょ

うか」

ココネ「ココネも手伝う」

美空「では私も…皆さんは待っててください」

手をパンとさせ、シャークティがそう言った後に会話に入ってなかったココネがそう言うと美空も後に続く。

さやか「（あたし、頑張る。この力で…）」

ゆま「（キョーコやさやかお姉ちゃん、ゆまも頑張るよ）

青の魔法少女は己を恥じた後に魔女と戦う決意をし、赤の魔法少女はそんな彼女を支え、守る事を決意し、緑の魔法少女は彼女達といる日常を守る為に頑張る事を決意する。

第6話　『それぞれの麻帆良歩き』さやか・杏子・ゆま編（後書き）

スネーク「と言う訳でさやか、杏子、ゆまの話だったな」

ネス「次は誰なのやら～」

リュカ「だね」

クッパ「次回を待っていてくれなのだ！」

第6話　『それぞれの麻帆良歩き』織莉子・キリカ編（前書き）

スネーク「次は上の2人か…」

ルイージ「だね」

第6話　『それぞれの麻帆良歩き』織莉子・キリカ編

キリカ「凄いね織莉子！」

織莉子「そうね」

周りを見てはしゃぐキリカに織莉子は笑う。

キリカ「けどびっくりしたよね…」

織莉子「そうね…まさかこの時間に魔法少女以外に魔法を使える人達がいるなんてね…」

キリカの言葉に織莉子は頷く。

…実は2人には前世…と言うか別の歴史の人生を歩んでいる。

織莉子自身、魔法少女になった事で未来を予知する魔法を手に入れている。

それにより織莉子が見たのは…まどかが魔女となり、見滝原が壊滅する光景の予知…

別の歴史の人生でも同じでこちらはまどかを殺していたがこちらでは違った。

それの原因は明久である。

モンスターを召還し、挙句魔法少女へと姿を変えさせ、それより前

にはキュゥべえを庇った。

ネオスS『そんなの知るか！たった1人の少女を犠牲しての平和なんて…こっちは願い下げだぁぁぁぁぁぁぁぁ！！』

そして自分にそう叫んだのだ。

キリカ「織莉子？」

織莉子「えっ？あっ？ご免ねキリカ」

キリカに声をかけられ、無意識にあの時叩かれた方の頬を押さえていた事に気づき、慌てて返事して謝る。

？？？「ちょっとそこのお2人さん」

いきなり呼ばれ、2人は振り返るとお団子頭の少女、超がいた。

織莉子「…誰かしら？」

超に織莉子は警戒する。

それにキリカも身構える。

超「私は超・鈴音って言うヨ、千雨さんと同じクラスメイトで裏を知る者よ」

キリカ「千雨…ああ、あの緑髪の眼鏡をかけた奴ね」

思い出して言うキリカに超は頷き…

超「それで？自分の予想した未来と離れてる事の感想はいかがかな？」

其の言葉にキリカは魔法少女の姿となって自分の武器を超の首に突き付ける。

キリカ「お前は何者だ？」

超「落ち着くよ、これじゃあ話せる事も話せないね」

殺気を放つキリカに超は両手を上げ、苦笑して言う。

キリカは織莉子の方を向き、織莉子は頷いたのを見た後にキリカは武器を放す。

その後にキリカに睨まれながら超は言う。

超「私は実は未来から来た火星人アル」

間

キリカ「ふぅ～ん」

織莉子「……」

超「いや、そこの人は分かるがそっちは痛い人と見ないで欲しいネ；」

疑いの目で見るキリカと可哀想な人な目で見ている織莉子に超はそう言う。

コホンと咳払いした後に超は言う。

超「けど未来から来たのはホントヨ…まぁ、今は役に立たない無駄知識ネ」

織莉子「？どう言う事？」

苦笑する超に織莉子は聞く。

超「簡単よ、私の知る歴史と違うからネ。私の知る歴史ではあなた達魔法少女やアデューさん、明久、康太は本来はいないアル」

その言葉に織莉子とキリカは驚いて超をじっと見る。

超「あなた達も未来を変えようと未来…と言うか別の流れから来ただろうけどこの時代だと変に介入しようとすれば逆に自分達の予期する破滅とは違う…さらにやばい最悪になると思うから止めとくネ」

織莉子「…なぜ私たちが別の歴史から来たと判断したの？」

その言葉に超は思いっきり分かるよと前置きした後に…

超「だってあの場にいた時にあなた達２人と暁美　ほむらは他の人達より驚きまくってたからネ」

そう言い終えるともし良かったら此処に食べに来るネ、初回は半額するよと紙を渡して去る。

織莉子「変に介入すればさらにやばい最悪になる…か…」

超の言った言葉を織莉子は呟いた後に目を瞑る。

そして目を開いた後にキリカを見る。

織莉子「キリカ、目的変更、鹿目さんを守るわよ」

キリカ「織莉子がそう決めたなら私は従うよ」

織莉子の言葉にキリカは笑顔でそう言う。

白と黒の魔法少女、見滝原の運命を変える為に決意を新たにする。

第6話　『それぞれの麻帆良歩き』織莉子・キリカ編（後書き）

スネーク「と言う訳で織莉子とキリカの話だったな」

ネス「超さん絡んだね～」

リュカ「未来人だからだね」

クッパ「次回を待っていてくれなのだ！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3474v/

仮面ライダーネオス＆ネクサス ～魔法少女と仮面ライダー～

2011年11月6日02時04分発行